

「全人類皆殺し大作戦-後編-」

—二稿—

2025/6/30

脚本 太郎

〈人物表〉

春野 紡	(15)	中学三年生
霧崎 宴	(15)	中学三年生。殺人犯
霧崎 詩	(40)	霧崎家の母
霧崎 祭	(16)	霧崎の兄
高城 充	(45)	霧崎母の内縁の夫

1. 霧崎家・霧崎の私室（夕）

整然とした、物が少ない部屋。

春野紡（15）、椅子に座っている。霧崎宴（15）、足を組んでベッドに座っている。

春野のすぐ後ろの壁にナイフが突き刺さっている。

霧崎 「誰が最底辺だって？」

春野 「事実だ。さつきぼくら二人を『まともじゃない』と括ったが、その中でも優劣はある。ぼくは君ほど酷いいじめを受けてない」

霧崎、強く春野を睨みつける。

春野 「ライターで皮膚を焼かれることも全裸で廊下を這いずり回らせられることも動物の糞を食べさせられることもない」

霧崎、強く拳を握り締める。

春野 「そう思えばこそ、荷物を泥水にぶちまけられても、申し訳なさそうな態度を維持しつつ自分を保っていられる」

霧崎 「何それ。自分より下がいるから虐められても平気だっていうの？ わたしのことを考えて内心で嘲笑ってスツキリってか？」

春野 「勿論それだけじゃない。今のは一例だ。そうだね、街では野良猫を片っ端から蹴り殺してみたり、家ではむかつく妹や飼ってる犬を殴ったり、小動物とか投げて近所のガキの遊びの邪魔をしたりと、自分で手を下すことも——」

霧崎、春野を軽蔑の目で見ている。

春野 「そんな目で見られる謂れはないぞ。バレない範囲で、こういう細かい憎悪のやりくりをしているから——」

霧崎の表情が呆れに変わっていく。

春野 「君のように自分を過信することなく、自分より正しい人たちに刃向かわず、殺人なんて大きなリスクを冒すこともなくいられるんだ」

霧崎 「あつそ。それで結局何が言いたいわけ？」

春野、満面の嘲笑顔。

春野 「つまりぼくは、少なくとも君よりはずっとマシな、相対

的に正しい人間だということだ」

霧崎、悲しそうな顔になる。

霧崎 「それって……下らないよ、物凄く」

霧崎の溜め息。

霧崎 「長々話したけど、無駄だったかな。君も含めて、やっぱり世界の方が正しくないのかも。わたしとは合わない」

春野、無然となり、

春野 「何だと？」

霧崎、満面の嘲笑顔。

霧崎 「やーい、自分より下の存在にしか強氣に出れない、被害者にも加害者にもなりきれない腰抜け」

春野、驚きと怒りを露わにして立ち上がると、一歩詰め寄って、

春野 「黙れ。君は違うとでも言うのか？」

霧崎、表情を微笑に変え、毅然と頷く。

春野、少し気圧されながらも言い返す。

春野 「いいや、君だって腰抜けだ。分かってるんだぞ。本当は君に自分より強い奴を殺す度胸なんてないって。さっきあの女を殺したのだって……」

春野、しばし視線を泳がせて、やがて思い至ったというように、

春野 「そうだ。さっきあの女を殺したのだって、大方揉み合った末の愚鈍な過失致死でしかないんだろ」

しかし霧崎、キッパリと、

霧崎 「ううん、そんなことない。わたしちゃんと殺したよ」

春野、舌打ち。

不意に飛び付いて、霧崎に掴みかかる。
得意気な笑み。

春野 「はは、何てことない。ナイフさえなければ、君なんてただの——」

霧崎、春野の足を引っ掛ける。

後方に倒れる春野。息が詰まる。

霧崎、その上に馬乗りになる。

その手にはいつの間にかナイフが握られている。

勢い良く春野に振り降ろす。

春野、無様な悲鳴を上げ、目を瞑る。

恐る恐る目を開けると、ナイフが眼球の寸前で止まっている。

霧崎 「わたし、何人でも殺せるよ」

霧崎、立ち上がる。一切揺らぐことのない瞳と態度。

春野、恐怖で言葉に詰まる。

やがて悩まし気に言葉を絞り出す。

春野 「じ、じゃあ……それならどうして今まで、今までは、黙って虐められてたんだよ？ どうして今日突然、あんなことしたんだよ？」

霧崎、腹部に手を当てる。

霧崎 「今までは、溜まるのを待ってたんだと思う。でももう、充分溜まったから」

霧崎、ナイフの刃に見入る。

霧崎 「というか、一人くらい殺しておかないとはち切れそうなくらい溜まっちゃったから、やったんだ。わたしがバラバラになっちゃう前に」

嗤う。

春野の顔に恐怖が浮かび、這って少し後退する。

霧崎 「本当は今も、お腹がはち切れそうで苦しいくらいなんだ。早く誰か殺さないとうにかなりそう」

春野が短い悲鳴を上げ、壁にぶつかるまで後退。

春野 「く、来るなよ」

霧崎 「動いてないじゃん。そんな怖がらなくて大丈夫だよ。君とは共犯の約束したじゃない」

霧崎、ゆっくり振り返り、ドアへ向かう。

春野 「どこ行くんだよ？」

霧崎、ドアを開けた状態で立ち止まる。

霧崎 「せっかくだから、下らない所を彷徨ってる君にお手本を見せてあげるよ」

霧崎、楽しそうに笑い声を上げながら、全力疾走で退室。ドアは開いたまま。

春野 「え？」

激しい足音が続く。

複数人の悲鳴と激しい物音。

春野、強張った表情でしばらく立ちすくむ。

数秒後、ドアに向かう。

2. 霧崎家・二階・廊下（夕）

霧崎の私室から春野が恐る恐る身を覗かせる。

祭の私室から四人の少年たちと霧崎が勢いよく飛び出してくる。一番前を走るのは霧崎祭（16）である。

五人は階段に向かっていく。

霧崎が一番後ろの少年の背中にしがみつこうようにして、彼の首筋にナイフを何度も何度も突き刺している。少年は走りながら藻掻いている。

少年は階段の最初の段の寸前で力尽きて倒れる。

3. 霧崎家・二階・祭の私室（夕）

ドアは開け放たれている。

少年たち数名の滅多刺しにされた死体が血塗れで倒れている。

4. 霧崎家・階段（夕）

最後尾の少年の死体が二人目の少年に覆いかぶさり、少年たちがドミノ倒しのように階段を滑り落ち、血が広がっていく。

霧崎が三人の少年の首のあたりを順に踏みながら階段を駆け下りていく。彼女の一步に合わせて、三人の脛骨が折れる音が響く。

祭、階段の一番下で呻き声を上げながら起き上がるうとしている。

その頭を霧崎が蹴り飛ばす。

5. 霧崎家・玄関（夕）

高城充（45）、まだ壁に寄りかかって寝ている。

吹っ飛ばされた祭がその側の壁に顔面を強打する。

彼の血が壁に散る。

祭が血塗れの顔半分を押さえながら起き上がろうとする。

霧崎が助走をつけて祭の頭を蹴る。

祭の顔面が再び壁に激突してさらに血が飛び散る。

霧崎、祭の頭をサッカーボールのように何度も何度も蹴り続ける。

× × ×

祭、首があらぬ方向を向き、自分の血に沈んで死んでいる。目、鼻、口の全部から血を流している。

霧崎がリビングから出てくる。

6. 霧崎家・リビング（夕）

霧崎詩（40）、御神体に向けて土下座したまま、首から血を流して死んでいる。

7. 霧崎家・玄関（夕）

霧崎が高城の抱えるビール瓶を奪い取り、それで彼の頭を殴りつける。ビール瓶が割れ、高城は跳ね起きる。

霧崎、高城の口の中にナイフをゆっくりと喉奥まで挿入する。

ゴボゴボと溺れるような断末魔。

高城が手足をばたつかせる。

時々、霧崎の手を高城の爪が引掻くが意に返さない。

大きく見開かれた高城の両眼。

霧崎が高城の右目に人差し指を突っ込む。

高城の暴れる力が徐々に抜けていく。

霧崎が高城の口内でナイフを掻き回す。

いつの間にか階段を降りていた春野が後ろからその様子を見ている。

霧崎の声「どう？　今この家で正しいのは、わたしたち二人だけだよ。死人に口なしなんだから」

霧崎がナイフを抜きながら振り返る。彼女は全身に返り血を浴びて、清々しく笑っている。

霧崎　「君の言う『正しさ』なんてさ、所詮は無理やり奪い取る程度のものなんだよ」

春野、羨望と陶酔の眼差しで霧崎を見ている。

やがて勢いよく頷く。

そしてウキウキした足取りでリビングに入っていく。
数秒後、満面の笑みで、包丁を手に出ってくる。

春野　「君の言う通りだ」

霧崎、嬉しそうに頷く。

春野、スキップするように高城の死体へ近づく。

春野　「一緒にもっともっと殺そう」

そして、その頭頂部に包丁を思いっきり突き立てる。

終